



さいし 長岡京の祭祀遺物

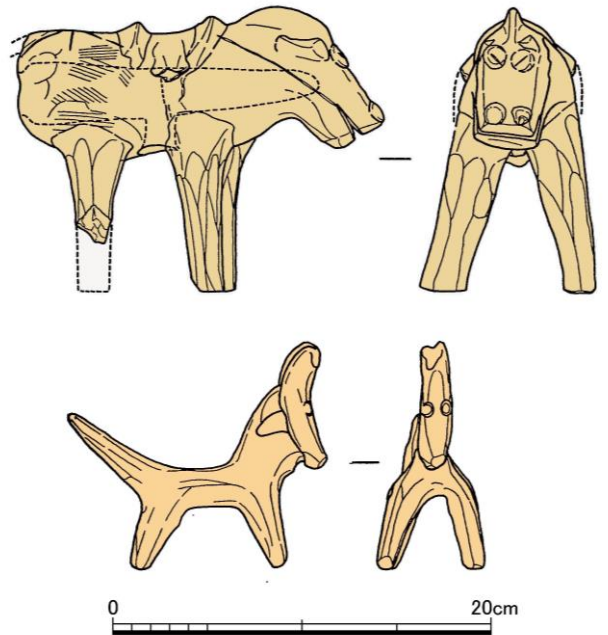
展示期間 平成30年7月18日(水)
～平成30年10月7日(日)

※図書館休館日を除く

長岡京の発掘調査では、一般的な土器などのほかに、一見何に使ったのかわからないものも見つかります。これらは、当時の人々のおまつりやまじないなどの、精神活動にかかわるものと考えられ、祭祀遺物と呼ばれます。主なものには、土馬、墨書人面土器、ミニチュアカマドといった土製品、人形、斎串といった薄板を加工した木製品があります。また鏡や鈴などの銅製品のほか、銅銭や櫛、あるいは土錘（網のおもり）のように、本来の用途とは別におまつりに使用されたものもあります。今回は長岡京で出土する代表的な祭祀遺物について紹介します。

土馬

長岡京ではもっとも多く出土する祭祀遺物です。一見、犬のようにも見えますが、これは奈良で生まれた土馬の特徴で、簡略化が進んだ結果です。長岡京遷都以前の乙訓地域では他の地域と同じように、土師質や須恵質の個性的な土馬が作られていました。しかし、遷都以後はすべて簡略化された土師質の土馬に統一されます。これは平安京においても同様で、都を中心に出土することから、都城型土馬と呼ばれます。文献には雨ごいや雨止みのために馬を奉納したと記されていることから、水に関連した祭りに際し、本物の馬の代わりに使用されたと考えられています。また疫病神の乗り物としての馬の脚を折ることで、病や災いが広がるのを防いだともいわれます。いずれにせよ、長岡京では普遍的に使用されていたようです。

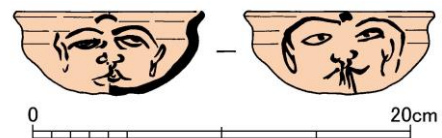


上—長岡京遷都以前の土馬（今里遺跡）

下—長岡京出土の都城型土馬

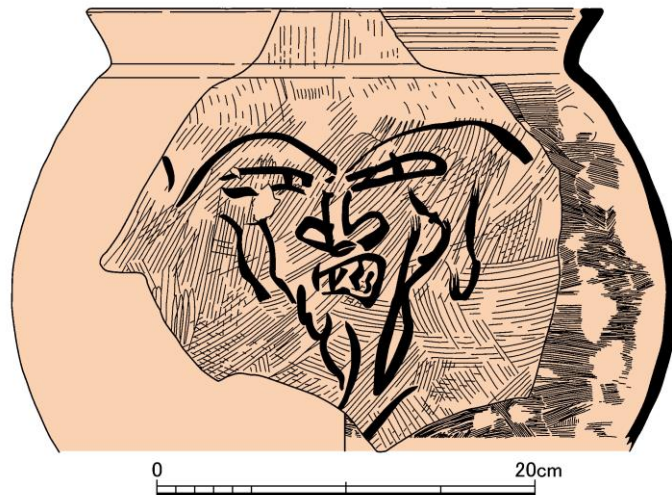
墨書人面土器

土器の表面に様々な顔を描いたもので、鬼や疫病神を表したもの、あるいは正倉院に残る布製の面との類似性から、外国人の顔という説もあります。大半は人面を描くための専用の土器を使用してい



墨書人面土器
(小型の専用土器に描いたもの)

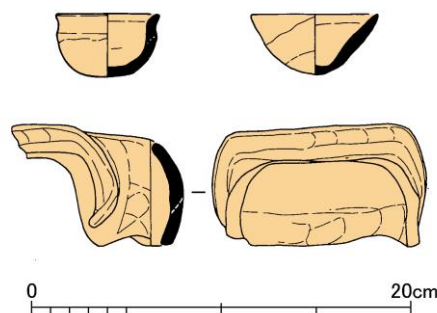
ますが、実用の甕かめを使うこともあります。水路や川などから出土することが多いため、土器の中に災いや罪けが・穢れを封じ込めて、水に流し去ったのではないかと考えられています。表情は険しいものから、穏やかなもの、思わず笑ってしまうようなユーモラスなものまであり、中には記号状のものもみられます。また顔の数も1面だけ描くものから、全体に4面描くものもあり、表情や数が、願い事の大きさや違いを表しているのかもしれません。



墨書人面土器（大型の甕に描いたもの）

ミニチュアカマド

煮炊きを使う移動式竈かまどのミニチュアで、同じくミニチュアの鍋や甕とセットになります。古墳時代後期には、渡来系の人々のお墓から出土していて、古くから外国の神様を祭るために使われていたようです。長岡京から出土するものは、土馬と同じく、奈良時代のものに比べてかなり小型化が進んでいて、ままごとのセットのようです。一説には、竈の神様が人の罪を告げるために天に昇るのを防ぐため、わざとこれらを壊したのではないかとされています。



ミニチュアの甕と鍋（上）と
ミニチュアカマド（下）

長岡京の祭場

これらの祭祀遺物は、長岡京内各所で出土しますが、時に百点以上もの大量の祭祀遺物が見つかる場所があります。現在までに確認されているのは、西山田遺跡にしやまだ（長岡京市）、古城遺跡こじょう（向日市）、大藪遺跡おおやぶ（京都市）、水垂遺跡みずたれ（京都市）の四か所で、ちょうど都を取り囲むよう分布しています。毎年6月と12月の晦日みそかには、国家規模で行われる「大祓」おおはらえの儀式があり、これらはその祭場の跡ではないかとみられています。



長岡京の大規模な祭場